

天竺暮らし雑記

里見駿介

インド童話選「ジャータカ物語」(岩波書店)を読み、何のアヴァターラ(サンスクリット)梵語で化身の意)だかは不明だが天竺に憧れ、大学でインド関係を学んだ。卒業後は商人としてボンベイ、ダッカと通算二十年弱(含むマニラ)駐在、ヒンドゥー教、イスラーム教、キリスト教・・に一寸触れた。定年後も幸い同地域とお付き合い。印度亜大陸初訪問の方を念頭に入門編的な事を少し述べてみたい。

挨拶・会話

“ナマステー”は、会った時にも別れでも朝な夕な、いつでも使える挨拶言葉で主にヒンドゥーが使用。ムスリム(南西亜ではムサルマーンとも)は、国を問わず“アッサラームアラエークム”(平安が貴方にありますよう)を、答礼では、“ワラエークム アッサラーム”(貴方にも平安が・・)と云う。

我国土の約九倍のインドには様々な民族、宗教、言語・・があり、挨拶も多様だが、人口の八〇%以上のヒンドゥーのナマステーを

我々は使用して問題ないでしょう。北インドではくだけたナマスカル(ベンガルではノモシュカール)も使う。尚、ナマステーのナマスは梵語で「丁寧なる挨拶」、テーは「あなたに」を意味、またナマスは仏教を通じ「南無」として我が国に入った由。

続いて会話となりますが、有名な「四種姓制度」のバラモン(婆羅門、司祭)・クシャトリア(刹帝利、王侯士族)・ヴァイシャ(吠舎、庶民)・シュードラ(戊陀羅、隷属民)、更に最下層の不可触民ハリジャン“神の子”(自称ダリト、独立後の指定カースト)からなる所謂「カースト」の所属を訊くのは失礼。カーストはポルトガル語で「血統、家柄」の意味のCASTA由来。インドでは本来は種姓を「ヴァルナ」(色)、職業集団を「ジャーティ」(生まれ同集団)と称するが、この二つが混同何れもカーストと呼ばれた。

宗教や政治の話は真摯な限り問題ないが、インド人は口角泡を飛ばし早口で論じるので話について行くのが一苦勞。自分は無宗教・

無神論だと発言したら“信仰心のない人間は考えられない・・”と思われること必至。理由を説明出来れば結構だが、私には至難の業で爾来 I am a Buddhist.

宴席・食事：

種々のパーティーでは、エチケツト&プロトコールを弁えていれば心配不要。贈物は花や菓子が多いが親しいとウイスキーも歓迎。昔は証明書(私は勝手にアル中証明と呼んでました)無しには買うのも大変だったが今は酒屋が増え国産もワイン他多種。二十八州・七直轄地域中ドライはグジャラートとミゾラム。ゴアは酒税がなく飲代が安かった記憶。

菓子は蜂蜜をシロップで煮詰め砂糖を塗した様な極甘他各種。ミターイー、ミシュテイーと称すスイートは祝い・儀式に欠かせぬ重要な物で行事により、例えば端午の節句の柏餅、彼岸のお萩・・の如く決まっている様だが、我々には区別は困難故ケーキやチョコが無難。羊羹や和菓子は喜ばれず、唐辛子・山葵味の煎餅とかは大歓迎。

料理を手で味わう時は右手が原則。地域・階級他で親指・人差指・中指の三指だけまた第二関節迄とか、全指や掌迄も使う人もいます。鯔を手で食べるのと同様に触感も楽しみましょう。紅茶を受け皿に移し飲んで見ますが猫舌の為とも云われます。

ムスリム、ヒンドゥー・では衛生感に関係なく左手は不浄也の考えあり食事に限らず左の扱いは要注意。尚、塵紙を使用せずトイレでポット等の水での水洗(？)は左手。

ヒンドゥーにはチャパティ等はトレイから直接取って貰い、仮令右でも触った物を渡すのは避けましょう。“カルカティー(手が触れ穢れた物)”です。しかし、ムスリムは、パンやナンを人類皆家族の感で手で分けまです。食材は宗教等で許されると駄目な物、ヒンドゥーに牛肉、ムスリムに豚肉が御法度は皆承知しているが、ムスリムはビーフでも屠殺に際しお祈り等のプロセスも必要でハラール(Halal)は今や有名。尤も緊急時はハラールでなくてもよいと云われ、逆のハラム(Haram)とその中間のシユブハ(Shubha)なる概念もあり単純ではない様。紀元前三二〇年頃インダス河を越えパンジャーブに進出したアレクサンダー大王は東征後帰還しましたが、その際インドに残り南インドのクルグ地方に住むヒンドゥー・コミュニティには牛肉OKの人達もいる由。

肉食・ノンヴェジタリアン(ノンヴェジ)と肉食・ヴェジタリアン(ヴェジ)が居り、機内食でも尋かれる。ヴェジでもジャイナ教徒は根菜類は駄目と複雑で肉・魚や野菜料理は別の皿で供するのがベター。社内食堂では誰でもOKな菜食が無難。乳及び乳製品は宗教や人種に不

拘問題なし。“マック”他も人気だが流石にビーフ・バーガーはなくヴェジは緑、ノン・ヴェジは赤で区別。食品添加物保護条例で動物性は商品に赤丸を正方形で囲んだ印、植物性は緑マークの印刷が義務、因みに乳製品は緑。色と云えばアルコールや茸類はタマス(翳質)で黒、香辛料や大蒜等はラジャス(激質)で赤、ミルク・ヨーグルトとか植物類は最上のサットヴァ(純質)で白との事。この。“質”を考慮しアーユル・ヴェエダに則った飲食物もある。

結婚式は気候が良くなると多く、盛大で賑やか、ヒンドゥーの場合は歌・踊りもあり料理も選べる。式・宴はホテルや慶事式場(マングル・カールヤライ)が多くアルコール類が出るケースも多々。ムスリムの場合は男女別々に食事だけ(ダッカの一流ホテルでのムスリム結婚披露宴では男女一緒、アルコーも出たが之は特例)。

開始は一時間半位遅れが普通且つ夜中迄だが、一流ホテルの際は要確認。祝儀は装身具とか家庭用品が喜ばれる。大物からの招待では手ぶらでもOK。奇麗な祝儀袋にお金を包む現地の方もおり、この場合は金額に端数として1をプラスすると縁起が良くこのプラス・ワンは他の目出度い時にも共通。服装は男女共普通で構いませんが、日本女性は此の機にサリーでも。葬儀は短時間で質素、お香典の類も不要。服装は普通、黒はキリスト教徒以外不要。

所作：

タイでの“精霊が宿る頭を撫でてはいけない”は皆さん御存知ですが、お釈迦様御生誕のインドも同様と御理解願います。

インド人と交際し当初、戸惑う所作・仕草は首振り、大体は共通のポディー・ランゲージで理解可能ですが、首振りには御注意を。ゆつくり何度か、左右と云うか首を傾げる動作をしたら、その意味は“YES”です。因みにNOは、首を右左に回す様な仕草で日本の嫌々と同じ感。顎を突き出して小刻みに上げると“お前さん何か云いたいのかい?”

この辺を理解するとネゴも順調、二〇〇九年第八十一回アカデミー賞八部門他受賞の「スラムドッグ\$ミリオン」も面白味が増します。マハートマ・ガンディー・ジーは非暴力でも有名ですが、インドでは暴力行為自体は勿論、勘違いされる動作にも十分注意願います。親しい気で相手の肩を叩いたり、胸を掴まずとも触ったり、親愛の情で女性同士がぶつ様な振りも、暴力行為と看做される惧があります。

最後に所作ではありませんが、“馬鹿(莫迦)”は梵語、ヒンディーでも通じベンガリーでは“ボカ”故ご用心を。

(さとみ しゅんすけ・財団法人 海外職業訓練協会(OVTA) 国際アドバイザー・認定 NPO法人 シャプラーニール評議員)